root(s)

osage

短　編　集

murffin
discs

目　次

まえがき　01
letter　02
最終兵器　08
移ろう季節に花束を　12
ドライフラワー　16
許して　21
ウーロンハイと春に　26

まえがき

あの家のドアは建て付けが悪くて
隙間風が時に大きな音を立てる。

ふと昔のことを思い出した。

イヤホンから流れる音はあの時のまま、
時間だけが流れていくのをじっと見つめている。

音楽を聴いて感じることは人それぞれである、
とすれば、そもそもこんな前書きは
必要ないのかもしれない。

イヤホンのボリュームを少しだけ上げる。
音もなく閉まるドアを背に、踏み出した一歩は
昨日までの貴方がまだ知らない道。

これから先はそれぞれの物語。

山口 ケンタ

letter

浅川 美香

初恋のあの子はいつも甘い香りがした。香水とかじゃなくてあの子本来の自然な匂い。そして何より笑顔が眩しくて太陽のようで。僕はそんな彼女のことが昔から好きだった。僕たちは幼なじみで、物心ついた時からいつも一緒にいた。僕の隣にあの子がいるのがいつしか当たり前になっていた。彼氏になれなくてもいい。ただずっと、あの子の側にいられるならそれだけでよかった。それだけで幸せだった。しかし、そんな僕の願いは一通の手紙によって失ってしまった。

高校生になった今でも僕たちは一緒に登下校していた。

「あのさ、少し話したいことがあるんだけど。」

「どうした？」

「私ね、実は彼氏ができたの。だから明日からは一緒に帰れないや。急にごめんね？」

なんの前触れもなく突然そう言われた。彼氏…。そっか…。僕はショックだったが、その気持ちを隠して彼女に聞いた。

「その子のこと好きだったの？」

「ううん。あんまり話したことなかったけどいい人そうだったから。手紙を渡されたんだけど、すごく気持ちがこもっててね。嬉しかったんだ。」

そうとても幸せそうに話す。そんな彼女を見ていると胸が締め付けられて痛かった。それと同時に思い出した。まだ僕たちが中学生の頃の会話を。

「手紙を渡されて告白されるのって憧れるよね。」

昔、彼女が僕に言ってきた。

「そうか？手紙って少し古い気もするけど。」

「たしかにそうかもしれないけどさ、手紙って書くの結構大変じゃん？なんか私のために書いてくれたんだなって思うと全然知らない人でも興味持つかもしれない。私もいつかそんな告白されてみたいな。やっぱ憧れちゃうよ。」

「ふーん。」

もうその時から彼女のことが好きだったが、告白する考えとかなくて。軽く聞き流してしまっていた。

自分の気持ちを必死に抑えて彼女に言った。

「おめでとう。よかったじゃん。僕のことは気にせずに楽しみなよ。」

彼女が幸せならそれでいい。こうして僕の初恋は儚く散った。

あの子と毎日歩いていた道を一人で歩く。周りの景色も何一つとして変わってないはずなのになんだか少し寂しくて切ない。つい最近までは登下校の時も楽しくて幸せだったのに。今は一人で歩くのは少しつらい。あの子と過ごした時のことを思い出してしまうから。帰りにクレープ屋に寄って二人で食べたり、小さい頃によく遊んでいた公園に寄って暗くなるまで話したり。特に用事がない時はいつもその公園に行っていた。僕らの思い出の場所だった。つい最近のことなのにずっとずっと昔のような出来事のように感じる。楽しそうなあの子を見ていると嬉しかったけど、本当は僕があの子を笑顔にしたかった。幸せにしたかった。僕が告白をしていたら何か変わっていたのだろうか。今でもあの子の隣に僕はいただろうか。でもどんなに悔やんでももう遅い。意味のないことは考えるのをやめよう。自分がつらくなるだけだ。あの子を困らせるだけだ。この気持ちはもうしまっておこう。あの甘い香りも眩しい笑顔も忘れよう。それがきっとお互いに一番いいことなんだ。

あの子を見ていると胸が苦しくなってつらくて。いつしかあの子を目で追うのをやめた。目が合ってもついそらしてしまう。手を振られても気付かないフリをしてしまう。我ながら情けないとは思うけど、他の方法が見つからない。あの子と話したいけど話せなくて。どんな風に接すればいいのか分かんなくて。今あの子と話すと僕の気持ちに気づかれるかもしれない。困らせるかもしれない。だからあの子をずっと避けてしまっていた。

『最近元気なさそうだけど大丈夫？』

あの子からメールが届いた。嬉しかった。こんなに避けていたのに僕のことを気にかけてくれるなんて。

『大丈夫だよ。』

『それならよかった。またさ、前みたいにゲームしに行ってもいい？』

本当はしたい。また前みたいに笑って話したい。だけど今会ったら僕はうまく笑えないかもしれない。泣いてしまうかもしれない。

『最近忙しいから無理。ごめん。』

冷たいのは分かってる。こんな言い方はだめだって分かってる。だけど自分が傷つきたくなくて。保身に走ってしまった。

『そっか。こっちこそごめんね。』

それから連絡は来なくなった。悲しいけど。つらいけど。でもこれがあの子にとって一番いいだろう。あの子を困らせたくないから。自分の気持ちを偽ってでもこの気持ちはバレないようにしないと。

高校生活もあと一ヶ月。そんな頃、久しぶりにあの子からメールがきた。

『あのね、私、大学に行くために地元を離れることにしたの。遠くに引っ越すからもう会えなくなるかもしれない』

急な報告にびっくりして唖然としてしまった。一年近く連絡を取っていなかったからなんて返信すればいいのか分からなかった。その時ふと机の引き出しに入れていた手紙のことを思い出した。フラれたあの日、文面を気にせず、感情に任せて書いた手紙。「好き」という感情を抑えるためにけじめとして書いたのだが、恥ずかしくて宛名は書けなかった。僕がずっとあの子に伝えたかった言葉をただひたすら書いた。その手紙は渡さないと決めていた。自分の「好き」を抑え込んで伝えないつもりでいた。だけどもう会えなくなるかもしれないと思うとその「好き」が溢れてもう止められなかった。こんな気持ちはあの子を困らせるだけなのに。どうしてあの子のことがこんなに好きなんだろう。どうしてあの子じゃないといけないんだろう。どうしてこんなにもあの子のことばかり考えてしまうんだろう。

引っ越し当日。この日がこなければいいと何度も思った。色々悩んだ。葛藤もした。この気持ちを伝えることでもう前のような幼なじみではいられなくなるかもしれない。嫌われてしまうかもしれない。怖かった。怖かったけど。それでも自分の気持ちに嘘はつけなかった。逃げるのはもうやめよう。僕はあの子を困らせると思ってこの気持ちを隠していた。だけど本当は僕が傷付くのが怖かっただけだったんだ。あの子を言い訳にして逃げていただけだったんだ。きっとここで言わないと僕は後悔する。後悔するなら行動した後にしよう。僕はあの時の手紙に宛名を書いた。

『今から話したいことがあるからいつもの公園に来てほしい。』

そうメールをすると
『もういるよ』
と返信がきた。その返信にびっくりしたが、すぐに準備し、手紙を握りしめて公園へと向かった。
「ご、ごめん。遅くなっちゃって。」
「もう。本当に遅いよ。」
彼女は少し切なそうに、そして少し嬉しそうに笑った。

最終兵器

藤波 重光

「とりあえず、何食べる？」彼女が言った。
僕が、席につくと、
「君には、まだ伝えていないことがあるんだ。沢山、あるんだ」
彼女が笑って、僕に言う。
僕は咄嗟に耳を塞ぐ。彼女が怖い、いや違う。彼女の言葉が怖い。彼女が口を動かして話し始める。僕には声は届かない。でも、はっきりと何を言っているのか、次に何を言うか知っている。彼女の言葉を受け取っている。音はきこえていないのに、言葉が響く。やめろ、やめろ、やめろ、
天井。時計。夢だったようだ。気づけば、一人、朝にいた。嫌な苦みと寂しさが湧き上がってきた。彼女のいない朝だった。
朝の時間は一瞬に過ぎ、時間になって家を出た。ドアの外から、部屋の中を覗いた。僕と彼女の影が、残されたまま、生活していると思った。
目的地まで、時間に追われながら歩いた。みんな、時間に襲われている。人は時間に喰われている。神様がいるならば、時間が『最終兵器』だった。
向かい合ったビルの群れ。続々と人々を飲み込んでいく。そんなコンクリートタワーを前に、今日も憂鬱になった。
不意に世界を壊してやりたくなった。憂鬱でも、悲しみでも、苦しみでも、なんでもいい、世界に突き刺してみたい。すべてを手放して、自由になりたい。時間も、記憶も、狂ってしまえばいい。
また記憶が、僕にいたずらする。彼女が僕に話している。

瞬く夜空の星のこと。
好きな空の色のこと。
君が涙を流す日のこと。

過去の僕には、彼女の話すべてが、あざやかで知らないことだらけだった。
彼女と見た空の下に、行きたくなった。あの街の高い空を、仰ぎたくなった。
僕は立ち止まって電話をかける。今日の予定を壊すために。

あの街は、とても遠くにあった。電車に永遠とも感じる時間、揺られ続けた。途中で自分が馬鹿に思えた。辺鄙な土地にあるせいで着いた時には、すでに夕陽が街並みの縁に触れそうだった。少し歩くと見覚えのある喫茶店があった。僕は何かの欠片を拾い集めたくて扉を開けた。
君だ。そう思ってしまった。でも、振り向くその人は、君ではなかった。似ているのは後姿だけだった。
「いらしゃいませ」
希望や期待は、寂れた街の店員に化けて、僕を深いところに追い込んだ。僕は、店員を見間違えたことが罪に思えた。イスに座ると、あの店員が注文を取りにきた。僕が最初に目についた紅茶を頼もうとすると、店員が遮って「さっきは、どーしたんですか」と言った。「おせっかいはいらないよ」と返したが、急にどうでもよくなって、「知り合いに似てたんだ」と言った。その一言によって、すべて話すことになった。

誰かに聞いて欲しいことも、触れずに置きたいものも、すべて吐き出すと少し自分が軽くなった。疲れと引き換えに楽になった。席を立つと「駅まで送って行きますよ」店員が言った。その顔が少しだけ過去の想い人に似てる気がした。でも心音のリズムも、誰かに対する想いも、変わらなかった。

外へ出る。
空は朱に揺れていた。
時間がやがて、この空も奪っていくだろう。落ちるの夕陽が最後に絞り出す美しさ。この夕焼けと同じように、喜びも、嬉しさ、寂しさ、悲しさも、少しずつ移ろう。時間が過去を流していく。

店員は結局、駅のホームまで着いてきた。最後に見た彼女は想い人の影に重なった。僕は、ここに自分を縛るものを置いて行こうと思った。
でも、記憶の中に彼女はいる。ずっとずっと持っておくから。

新しい記憶を。
始めよう、今から。

移ろう季節に花束を

齋藤 大知

――東京にはモノがありすぎるんです。

水分を失った花束が、今しがた降車した女性客の言葉を、脳裏に反復させていた。

「品川」と記されたナンバープレートに浮かぶ水滴が、夜露か朝露なのかは曖昧だが、長野の黒ぐろとした夜闇の中で、タクシーの車体だけがはっきりと漆黒色をしている。私は、漆黒から洩れる車内灯に、赤いハイヒールをコツコツ鳴らしながら、踊るように手を振り、白い吐息と共に霞の中に消えた彼女の姿が見えたような気がした。まるで、薄暗い道の中でひときわ輝く非常点滅灯を目にしたような気分だった。彼女が花束を捨て言った「モノがあるということは、それだけ何かに縛られている」という言葉が、ぴしゃりと頬を打つ透明な夜風に乗せられ、今頃になり妙な説得力を帯びてきた。

外気が私の身体を冷やすに連れ、いつもの冷静さが私を覆い始める。私はなぜこんな辺鄙な土地に立っているのか、呆れと共に後悔が足先からクツクツと湧いてきた。今になって思えば、定年退職を迎えるという崖っぷちに立ち、明日からの永い休暇が空虚な焦燥を駆り立てたのだ。東京の駅前で、花束を持つ赤いハイヒールのあの女性が舞い込んできた時、もう少し長くこの車に乗っていたいという欲が、私の冷静な判断力を溶かしてしまった。

しかしこれで仕事は終わったのだ。煙草でも吸おう。四月とは思えない薄明の空気は、吐いた煙を一層重く色付ける。人を送り続けてきた人生で、いざ送られる立場になる思うと、どうにも東京で生きていくのは、確かに生きづらいような気もしてきた。純白の山々を背に停車している品川ナンバーのタクシーは、居場所を探しているようで滑稽に見えた。歳を重ね、何本も絡まった糸のような都市で、どこを選べば目的地へ早く着くのかを熟知したが、今考えると無意味だったという風

にしか思えなくなる。
「あの、すいません」
唐突な声にぎょっとして振り向くと、身の丈に合わない大きなギターケースを背負った青年が立っていた。こんな場所でも朝早くからタクシーの利用客がいるのか。
「東京でしょ？　乗せてってよ」
青年はそのまま図々しくも回送タクシーの後部座席に乗り込み、どさっと座り込んだ。仕草の節々から思慮の浅さが垣間見える奔放なこの男は、あの街に何が見えているのだろうか。
「……なんで東京に？」
「ここにはなんにもない、東京には全てある、それだけですよ」
そのうち「僕は無敵だ」とでも言い出しそうな、鋭利な口調で青年は答えた。
「前から東京に行こうと？」
「今日、朝起きて思い立ったんだ」
彼は考えると言うことを知らないのだろうか。最後の最後に妙な男に絡まれたと思ったが、まだ枯れ方を知らない彼のその姿が、私に初めてハンドルを握った時の、目的地への道が無数にある不安と昂揚を思い出させる。しかし、どの道を選んでも確かに目的地に着くのだ。
「東京にはなんでもありますから」
社交辞令的に口から出た言葉は自分に向けた言葉のようで、思わず青年から視線をそらした。ふと左手の花束に目をやると、朝露を吸い、生気を取り戻している。私はこの花束を自分へのささやかな退職祝いにと思っていたが、なんだかもったいないように思えてきた。

「この花束、私から早めの引越し祝いです」
私からの唐突な提案に見るからに青年は動揺したが、するりと表情をくずし、花のようにはにかんだ。
「お祝いかお葬式かわかんないな、その格好じゃ」
制服姿の私を冷やかす青年に、羽織っている黒いジャケットを脱いで答えた。
「これで幾分かマシになりました？」
肌を刺すような夜風はいつのまにか身を潜め、代わりにわずかな青草のにおいを運んできた。途方もなく懐かしく瑞々しいこの朝は、六十年分の重力を曖昧にした。軽くなった足取りは、霜解けの水たまりをたやすく飛び越える。運転席へと戻った私は、車体の結露を散らすようにエンジンをふかした。
高速道路に差し掛かり、安全運転で走り続けた私の足元は、人生で一番強くアクセルを踏み込んでいた。開けっ放しの後部座席の窓からは、朝焼け色の、春の空気が舞い込んできた。

ドライフラワー

灯 敦生

隙あらば考えてしまう。ブルーハワイって何味だろう、なぜ傘を買うと雨が止むんだろう、彼女はどんな気持ちであの花を置いていったのか……。

考えているうちに、先輩コンビの「もうええわ」が聞こえ、私の出番がやってくる。何度も二人で立った板の上に「はいどうも〜」と初めて一人で手を叩きながら上がるとき、その音が余りに渇いて響いて、妙に納得した。——そうか、あの花は私か。

ひと月前、長らく共に暮らしていた彼女が、ドライフラワー一つ残して、部屋を去った。恋人でも友人でもない、お笑いコンビの相方という相関関係で、はじめに「一緒に住もう」と言ったのは彼女だった。正しくは、“言った”より“押し入った”に近い。玄関を開けた途端、スーツケースと共に雪崩れ込んできて、中の荷物を一通り広げてから、「提案があるんだけど……」と、先ほどの言葉を続けた。断る余地のない提案は、もはや提案と呼ぶのだろうか、私がまた考え癖を発動させている間に同居生活はスタートする。

整頓下手な私と違い、彼女はいつも部屋を綺麗にしてくれていた。彼女に訊けば、遙か昔仕舞いこんだネタ帳も、さっき置き忘れた眼鏡の在り処もわかる。だから今、一人になった私はそのどちらも探していた。何もかも手放せず、故に空っぽなこの部屋で。

各駅しか停まらない街、先に「コンビ組みませんか」と言ったのは、私だった。世界中が大掛かりなドッキリでも仕掛けているように静かな真夜中で、自分の心音だけやけに煩い。私の一世一代の“提案”を聴いた彼女は、その体温が計り知れるほど真っ白な息をふわっと零して、「プロポーズのテンションかよ」と笑った。「返事は？」と急ぐ私に、「いいよ」と軽い口調で、しかしその白色は濃いままで、何だか安心した私は、ドッ

キリのネタバラシがないよう願って彼女にハグをした。

私達の芸人生活は、この街を訪れる鈍行列車さながら地道なものだったが、彼女はずっと楽しそうだった。スベっても、怒られても、笑われても、翌朝には片付いた部屋で「私達のペースで大丈夫」と、凹みきった私を励まし、蜂蜜入りのホットミルクを作ってくれた。私は冬中、幾度となくその甘く温かな「大丈夫」を飲み続けたが、次の冬には拒否するようになった。温かさはノーテンキさに変換され、次第に焦りと苛立ちが募り、彼女の笑った顔を見ないようにした。

理由は考えずともわかる。いつからか戸棚に飾られたドライフラワー。あの乾いた色が物哀しくて責められている気になる。彼女を自分の夢に巻き込んでしまったこと……、痛くて後ろめたい、カキツバタの花。

三年目の夏、私達は小さなお祭り会場の待機場所にいた。どちらが決めた訳でもないが、互いにこれが最後の舞台だと予感していた。彼女には実家の家業を継ぐという噂があり、「お前はこの世界に残って、あいつの分まで頑張れよ」と、先輩芸人に肩を叩かれた。

“あいつの分まで頑張る”とは一体何だろう――また私の悪い癖がでる。

「お前の分まで頑張る」と勝手に背負われても、私なら余計なお世話だと思うし、何より悔しい。この先道が違っても、彼女の分は、彼女が頑張ってゆくのだから。私だってそう。でも、私達二人の道はここで終わってしまった、それは事実で……。

「冷たっ！」

一気に思考の奈落から引き上げられて、振り向くと、犯人はいたずらな五歳児の如く爆笑していた。凶器は、運営スタッフがくれたらしいカキ氷。上にかかったシロップを眺めて、「ブルーハワイって結局、何味なんだよってね」とその色が移った舌を出す。

しかし彼女はすぐにそれを引っ込めた。

「どうして？」

そう尋ねられ、私はようやく自分が涙を流していると知った。けれどいくら考えても、彼女の質問には答えられないだろう。だって言えるはずない、「私は貴方に、ただ隣で笑っていてほしかったんだ。今更気付いてしまった」なんて。その言葉は、彼女を困らせるだけで決して笑顔にできないし、私は彼女をたった一度だって幸せにできなかったから。

後日、故郷へ帰る彼女を急行の停まる大きな駅まで見送った。各駅電車に二人で揺られていると、不意に彼女が俯く。

「色々ごめん。ただ君に笑っていてほしかったのに、失敗ばかりしちゃって」

ハッとした。いつもの電車、いつもの街並み、いつもの笑顔が潤んでゆく。彼女が自分と同じことを思っているなら、私は「どうして」の答えをちゃんと告げるべきだ。

「幸せだったよ。貴方といられて、心から幸せだったから。ありがとう……」

それを聴くと、何度も何度も頷いた彼女は、やっと笑顔をほどいて泣いた。いつかの五歳児のようにではなく、あの真夜中にも似た静かな涙だったので、私はつい見惚れてしまう。

全てドッキリでも構わない、到底信じられない、奇跡みたいな日々だった――。

ピン芸人になって初めての舞台はまぁまぁウケた。一瞬、スタンドマイクの左側を空けて立ってしまい焦ったが、うまく誤魔化せた。帰宅して、一切濡れていない新品の傘を適当に室内に放ったが、これじゃダメだと外廊下に掛け直した。

一人でもこうして、「大丈夫」を一口ずつ飲んでやっていこう。決意して、掘り起した昔のネタ帳に、書き憶えない花の絵を見つける。

鮮やかに塗られたその色にブルーハワイを連想して、なぜか鼻の奥がツンとした。

そしてふと、添えられた文字を読めば、部屋に一つ残ったあの花が色付きだす。

“カキツバタの花言葉……幸せは必ずくる。”

許して

佐伯　芽衣子

うだるような暑さで目を覚ました。まだ外は闇に包まれ、カーテンのない部屋をチカチカと切れそうな古ぼけた街灯が微かに照らしている。重い瞼をうっすらと開け、枕元に置かれた時計を覗くと3時を少し過ぎたくらいだった。眠りについてからまだ2時間も経っていない。額にじわりと滲んだ汗がぼやけた視界に流れ込み、そのまま枕を濡らした。まるで泣いているみたいだ、とまだ夢うつつの意識の中でぼんやり考えていたら、本当に涙が出そうになって枕に顔を埋めた。

息が苦しいのはこの暑さのせいなのか、それとも寝付けないせいなのか。身体にぐっしょりと張り付いたTシャツを脱ぎ、寝転んだまま無造作に洗濯かごに放り投げた。汗まみれのTシャツは溢れかえった洗濯物の山から、音もなく滑り落ちる。まどろんだ意識の中で、散らかった部屋をぼんやりと見つめた。埃まみれのエアコンは去年の夏に壊れたまま放置されている。

来年の夏は新しいエアコンを買おうと約束していた。しかし約束が果たされることはなかった。動かなくなったエアコンはルーバーが開かれ止まっている。まるで過去に取り残されたまま、この部屋で淀む自分を映し出しているようだった。僕は埃をかぶったまま、ただ錆びていく塊だった。時間が止まったような静寂が部屋を支配し、自分の心臓の音が地鳴りのように大きく聞こえた。鼓動がだんだんと早くなっていき、込み上げる虚しさを押さえ込むように目を瞑って、息を飲んだ。耳の奥底で耳鳴りがするのを感じる。現実から遠く離れた夢の中に今すぐ飛び込みたかった。しかし一度夢から現実に引き戻されると、そう簡単に戻ることが出来ない。こんな日は再び眠りにつくことが出来ないのはわかっている。朝焼けが訪れるのをじっと待つしかない。

「眠れない時は、身体中の空気を入れ替えるように深く息を吐いてから吸うの」

そう微笑む彼女の姿を思い出した。記憶を辿り、僕は彼女の真似をする。仰向けになり、真っ白の天井を見つめ全ての息を吐き出した。部屋中の空気を吸い込み、身体中の酸素を全て吐き出すと一気に全身の力が抜け、頭が空っぽになった。胸が痛むほどの鼓動は引き潮のように去っていく。僕はほっとして寝返りを打とうとしたが、隣に誰もいないことを思い知らされそうでやめた。

彼女がこの部屋を出ていった時も、僕はこんな風にベッドに横になり、酒に飲まれていた。彼女は夕飯の片付けをした後、部屋着にコートを羽織りコンビニにでもいくような格好で玄関へ向かった。僕はいつもと変わらない彼女を気に留めることもなかった。

「ねえ」

ドアの前で立ち止まった彼女は、僕の方を見ずに言った。

「君はさ、本当に自分の手で人生を変えたいって思ったことある？」

僕は彼女を無視した。聞こえないふりをし、くだらない深夜番組を眺めていた。若いタレントの甲高い笑い声が、重い空気をさらに冷たくさせた。ふとタバコが切れているのを思い出し、「タバコ買ってきて、タバコ」とだけ吐き捨てるように言った。少しの沈黙の後、玄関のドアが開かれ、ギーッという軋んだ音が部屋に鳴り響いた。

「私はあるよ」

そう言って出ていった彼女が、戻ってくることはなかった。

あの頃の自分は絵を描くことに夢中だった。仕事もせずに朝から晩までキャンバスに向かい、生活の全てを彼女が支えていた。しかし完成しない絵が徐々に多くなり、それと引き換えに煙草と酒

の量が増え、そのうち筆を持つことをやめた。僕は自分に自惚れることだけが得意で、根気も意気地もない惨めな若造だった。彼女は急加速で落ちていく僕を肯定も否定もせず、ただ静かに見守っていた。居場所を作ろうとしてくれていたのかもしれない。毎夜、大量のキャンバスを段ボールに詰め捨てたが、朝になると必ず家に返ってきた。僕はそれをまた、夜になっては捨てにいく。しかし朝、目覚めると必ず僕の前には絵があった。僕と彼女の言葉のない戦いだった。

しかし彼女が出ていった日に、僕はキャンバスさえ失った。

僕は勝手に、彼女にもここしか居場所がないと安心していた。出ていったのも気まぐれで、どうせすぐに帰ってくると信じていた。そうして気がついたら、もう半年が過ぎている。

笑えるほど落ち込み方が下手くそで、当たり前の日常が消えてしまった時、自分の生活はさらに深い夜の闇に飲み込まれた。この部屋でひとり立ち止まったまま、時計の針が戻ってくれたら、と願うそんな耐え難い日々が続いた。当たり前だった現実は、記憶の中の過去でしかなくなっていた。いっそのことずっと夜に沈んでいたかった。不甲斐ない自分も、足の踏み場のない部屋も、この孤独も、夜は全てを隠してくれるような気がした。

しかし無条件に朝は訪れる。眩しい日差しは錆びた身体に突き刺さり、自分が生きていることを実感させられる。この部屋から出ることの出来ない僕は、苦しみに歯を食い縛るしかないのだ。もしあの日、僕がキャンバスを取りにいっていたら彼女は帰ってきていたのだろうか。そんなことばかり考えている内は、彼女の最後の言葉をまだ受け止めていないのだろう。時間は戻すことも、止めることも出来ない。過去は変えられないのだ。

それならばここから抜け出し、未来を変えようとした彼女に訪れる朝は、こんな悲しみに包まれていないことを願う。どうか暖かな風が彼女を未来へ連れていって欲しい。そうして穏やかな夜の空気を身体中で吸い込み、鮮やかな夢に向かう今日であって欲しい。

今の僕が彼女にしてあげられることは、そう祈ることだけなのだろう。

ウーロンハイと春に

これから先はそれぞれの物語。

osage

二〇一七年結成。
二〇一八年にはmurffin discesが
主宰するオーディションにてグ
ランプリを獲得。
現在は下北沢を中心に勢力的に
活動中。

著者　浅川 美香（駒場学園高校 文芸部）
藤波 重光（駒場学園高校 文芸部）
齋藤 大知
灯 敦生
佐伯芽 衣子

発行　murffin discs.

デザイン　大川 直也

監修　灯 敦生

root(s)

osage

murffin
discs